

△えんかく 便り ツノが生えるとき

近所の老女が「爺さんが一人でお宮掃除をしてきた。あんたはこやあせなんだ」という。当番でもない日に行くわけがないが、おいておいた。後日、隣人がいる場で、私がサボったといわれ、二本の角が生えた。この一件を「子息に話したところ、両親とも認知症だと誤りられた。家族は毎日角が出たり入ったりと大変なこと同情した。」

(名華女)

孫がやんちゃをいって愚図ると、即座にヌマホを持ち出して対応する。鬼の音が流れるアプリがあり、母である娘はそれを使うのだ。架空の鬼に任せるなんぞ親としてあるまじき行為だ！と年寄りらしい、私のツノが生えるのである。(すみちゃん)

一人暮らしの高齢の母は気丈だ。でも私の訪問時には、「あれもできない。これもできない。」「と弱音を吐く。遠方に住む私は、公的支援申請をしてヘルパーさんを依頼した。その結果、「自分で何でもできるから他人の援助なんかいらん!!」と。もー！(怒) (しばり)

人の親切心に付け込んで、図々しい要



No.59



△ハモン博士のまとめ

「角(ツノ)」を持つ生き物もいろいろあるが、ツノにも特性があるようじゃな。鹿のようにぼろっととれて生え変わるツノ、牛のように立派に育っていくツノ、キリンのように皮膚で包まれているツノ、そして目には見えないツノ。一番怖いのは、大きさが変化する目に見えないツノじゃろうな。ツノを生やさぬよう、生やさぬよう、穏やかに過ごしたいもんじゃ。



ここ数年、毎年決まった日にツノを生やし、豆をぶつけられてきた。ところがこの1年位の間は、年に一度どころか毎日のようにツノを生やされ、刀で切られる日々。たまに当たり所が悪く、真剣にツノを生やすこともしばしばであった。(俺)

問合せ

大口町NPO登録団体ハモン

☎95-1691

Be Ambitious vol.320

町内にお住まいの 20代の皆さんがリレーで登場!

夢に向かって!

三宅 珠里さん(豊田) H11・11月生



保育士になりたい

「おはよう!じゅりちゃん」と満面の笑みで毎日待っていてくれた先生が大好きで、幼稚園に通うことが楽しかった日々を今も鮮明に覚えています。小学生になり学年が上がると、小さい子と遊んだりお世話をしたりするうちに、保育士になりたいという夢を抱くようになりました。

現在は、大学で保育者として必要な知識を学んでいます。実習では、座学だけでは得られない経験ができ、保育者のやりがいを感じました。大学では同じ夢を持った仲間に出会い、協力しながらグループ活動をしたり、勉強を教え合ったり、実習期間中に励まし合ったり、お互いに心の支えになっています。

実習で感じたこと

座学では年齢毎の成長を学びましたが、実際はそれぞれ発達の違いがあることを感じました。「〇才になったらこれができる」と考えるのではなく、「この子は今、これを頑張っている」と、ひとりひとりの発達状況によって、その子にあった保育をすることが大切だと学びました。

実習先で子どもたちと遊ぶために、さまざまな制作物を準備しました。「今日は何がある?」「今日はどんな名札?」と楽しんでくれて嬉しかったです。実習を経て、目標とする理想像も明確になってきました。子どもひとりひとりと向き合い、それぞれの個性・能力を伸ばしてあげられるような保育士になりたいです。



▲エプロンシアターや手袋シアターなど。大学の先輩に教わりながら制作しました。